

大日比に就て

綿野孝瑞

現今淨土宗の寺院中舊態を持せるもの少き中、京洛の法然院みほとけ並び稱して一段感すべき律院西圓寺並びに法船庵は有縁の地にして、幼時より屢々參詣もし、又大日比邑に就ても知る所多き故茲にその大體に就て述べて見よう。

大日比は山口縣下日本海上の青海島あまの中央部に位する一小邑である。交通は萩市西方七里の山陰線仙寄驛より船にて二十分、或は渡舟（百米餘）にて大泊へ渡り、それより陸路三十分にて達せられる。昔は漁業盛んにして鯨組くじ云ふ捕鯨組合もあつたが現在は半農半漁で戸數は八十位である。各家は殆んおほぎ全て土塀を以て圍まれてゐる。西圓寺は大日比邑の東端の小高き地を占め、東南に大日比灣、東側に紫津浦を控へた小半島の頸部に位する閑寂な念佛道場である。之より西北三丁位の所に法船庵があり、西圓寺み山を挾んでゐる。

西圓寺は普通大日比流み云はれ關通上人の流を汲んだ念佛專修の、多少趣を異にした寺である。日常勤行は念佛のみで三部經禮讚等は一切用ひられてゐない。年に五回の別行は特に三次の教説もあり、念佛は朝四時より晚十時に及ぶ。その間説教、休憩があるにしてもその精進振りは容易に想像出來る。又絶対に肉食せざる事は驚く程嚴格である。現在の住職は十九世河島諦定師であり、弟子の外に「發心者」を稱せられる數氏が居られる。この發心者は納所をあづかり一生此所で念佛に過される特異な存在であり、又吾人には珍らしく響く語である。

法船庵は大日比三師中第一代法岸上人の遺跡で尼僧は約五十名であるが、平時は縣下六七ヶ所の末庵に分れてゐて年

五回の西圓寺の別行には集合して日夜念佛修行に過されてゐる。之等尼僧の師匠は西圓寺住職と定められてゐて、剃髮前に有髮の儘三年間庵に過し道心堅固と認められて始めて剃髮を許されること云ふ事である。又入庵に當つては一生の食扶持を持參する様にも聞いてゐる。之等の尼僧の殆んど或は全部は勿論加行はされて居ないらしい。同庵の尼僧は西圓寺の男僧より一層嚴格であつて、木魚は終日鳴つて居り又畑をも耕し蔬菜花等が栽培されてゐる。外出は網代笠が用ひられる。路上男僧と出會へば必ず物陰に入るか又は道をよけて公然と行き過ぎること云ふ事は絶対にない。同庵はトラビストの如き存在であつて、法岸上人が隱棲中尼庵にせんこと欲せられたものでその掟書も現存してゐる。

さて緣由に依り西圓寺を説明しよう。

「當山ハ古來本慶山天龍院西圓寺ト號ス。但シ享保天文ノ頃無住大破ノ折節書紀靈簿什寶等悉ク所傳ヲ失ヘリ。コレニヨツテ開基ノ師モ詳ナル事ヲ得ズ、創立ノ年度モ諦ニスルニ由ナシ」又「抑々其原ハ眞言宗ノ律院ニシテ長祿寛正ノ頃ヨリハ餘程已前ノ開基所領モ多分ニ持テル一郷ノ巨刹ナリキ」こある。往古は現在の寺の東隣紫津浦の「商人」邑にあつた。この商人邑は現在でも「商人千軒」と云はれてゐる事からしても相當繁榮してゐたらしいが、今は全く後を絶つてゐる。「イツトナク漸々ニ衰ヘ享祿天文ノ際ニ至ツテハ大ニ零落シ富有ノ者ハ多分仙寄ノ地方ヘ移住スル様ニ成行シカバ、其レニツレテ寺モ衰廢無住ニ打續キ終ニ朽チ頽ルルニ及ブ。コレニヨツテ同所觀音ケ尾ト云フ所ノ觀音堂ニ修補ヲ加ヘ右本寺ノ本尊其餘尊像等ヲモ共ニ安置シテ一兩ノ僧衆且々ニ奠供ヲソ續キ年序ヲ送ル」こある如く現在の西圓寺は創立當時とは宗派も所も異にしてゐる。其の後上利氏等の計ひに依り寛文八年の春「商人」廢寺を大日比に引越し、末庵を再興し堂主一人にて保たれ、數十年を経て元祿九年の夏上利一黨并に村中より國廳に願ひ本慶山天龍院西圓寺の原號を以て改めて淨土宗に再建された。その間の消息は次の如く記してゐる。「國廳ニ願ヒシカバ如所願彼差免寺山院號ハ皆古ヘニ存シ宗門ノ規則ニ任セ本尊ハ彌陀三尊ノ靈像ヲ立テ讚譽奉隨和尚（通村―青海島東端―向岸寺五世）ヲ

中興開山ノ師ニ淨土宗京師知恩院直末寺ニ興復成就セリ、ソレヨリ七代五十餘年ヲ經テ法岸寺法洲法道名僧相繼イデ出デ寺運頓ニ隆盛トナリ今尙參詣者絶ユル事ナシ」云ある。又「法岸上人當地大日比浦ニ來リシ時ハ戸數僅カニ二十戸計リテ殆ト眞宗派ト聞ク」云ある。之に依て見るも明かな如く大日比西圓寺は實に法岸上人に依て確たる基礎が築かれ、次いで法洲法道兩上人に依て完成せられ今に及んでゐるのである。本堂建築は十一世法道上人が三十一歳の時即ち文久七年に先師法洲上人の指揮を仰いで造られたものである。法藏は文政三年尊師法道上人靈夢に依りて建立されたもので三萬卷の藏書ありしも明治維新の際萩市明倫館に寄贈なつて現在約二萬卷を藏せられてゐる。その外大内義隆の護持佛・惠心僧都筆山越阿彌陀如來・名僧皇族方の御親筆・古手鏡等が藏せられてゐる。法藏の東側に「學校」云稱する一棟がある。之は往時衆僧の勉學に當てられたものであり、現在も尙書庫があり一室は等身の彌陀像が安置されてゐる。御廟所として西圓寺は大日比西端の「丸山」の小丘を有し、附近に「隱居所」がある。此處は西圓寺住職或は發心者が隱居し、兼ねて御廟の御守をせられるのである。

次に大日比三師傳によりて法岸法洲法道の三師に就て略述しよう。

法岸上人は圓蓮社光譽云號し周防國吉敷郡下津領の人で延享元年甲子五月四日に出誕せられた。性質俊利にして凡兒に類せず母の教示による所多く十歳の春上松村妙樂寺に入られ、後西念寺の諦譽上人の許にて同年四月十七日剃髮受戒された。十九歳の時江戸に下り緣山袋溪徹應和尚の室に入られ運察を法岸云改められた。其後遍世念佛の心を生じ日課一萬を誓約し又諸所に詣でて精進を重ね道情をきたはれ、後感ずる所ありて筍根塔の峰阿彌陀寺に詣で參籠された。師の思想の基礎は實に關通上人より得られたものである。關通上人は當時の代表的念佛者で專修念佛を標榜された善知識である。岸師が緣山惠照律院に入衆せられし際彼院の通師に歸依せられし信敬和尚の勧めに依るのである。岸師は相州生實の大岸寺の貫主便譽隆善大和尚より兩脈を稟承して江戸にかへり、夢中に通師を聽講せしを見て夢醒むれど當日の

通師の容貌講説が夢感に合致せる事より常に隨逐し、終に師資の盟約を玄默和尚と共に受けられた。時に明和二年乙酉、通師七十歳岸師二十二歳なりとある。其後京都轉輪寺に掛錫せられて専修念佛を行ぜられ、其後長州に留錫中西圓寺住職をすゝめられ、安永八年三月二日に住職されたのである。傳に師の教化を記して「師入院後直ちに四十八日の別行を發起し、月々村中の老少を集へて勸誡せらるゝにもこより邊鄙の事にて法門を耳なれざる故、一方には往生要集の地獄の圖畫をかけ、一方には當麻曼陀羅をかけ奉り地獄の圖に就て因果應報の道理を示し曼陀羅によりて別願大悲のむらなく善惡智愚おしなべて念佛すれば順次にかゝる妙境に生ずるの義趣をねもごろに示されければ、村中の老若男女一人も残らず日課念佛を誓受し、田うつにも、薪こるにも、茶つみ、水くみ、網ひき、釣をたるゝにも念佛せざる者なく、猶こしけき世渡りの中にも、毎夜暮六ツ時より五ツ時迄本堂に參詣して念佛する事常の式となれり云々」とあり師の教化の大なりし事が推察できる。又「毎月二日十四日廿五日の三日を念佛會日と定め曉七ツ時開白、日中前後兩座の勸誡をなし、また毎月五日は小兒念佛會にて佛前に菓子を多く供へ置線香一炷つめて先亡小兒の靈に回向し其の後献備の菓子を集會の小兒に分配せらる」とある。この小兒念佛會は現在「こどもねんぶつ」と稱せられ毎月十四日に行はれる様に記憶してゐる。之は今日の日曜學校に類するものである。

是の如き上人の偉大なる教化は長州一圓に及び門徒衆の教化も有名である。其の他諸堂新建にも大いに力を致されて老後は丸山の隱室に閑居され、その間自由なる時間を諸所の化益に費されて現在の法船庵で遷化された。時に文化十二年乙亥十二月五日酉の上刻である。春秋七十二法臘六十三である。上人往生の地たる隱室は尼庵にせんきて建立なつたもので左の如き尼庵の掟を制定された。

尼 庵 の 掟

一男僧男子出入堅制禁の事

但師用井に不淨掃除の人等は制外の事若無據要用ありて入來候はゞ、尼衆一門にて聞届、速に歸しまうすべく候遅々して無益の物語堅禁制の事、たゞひ無據要用にても男僧男子は夜中の出入堅禁制、また親子の間たりこも止宿無用、暮六ツ時を限りて出界せしむべし、又男僧男子にかぎらず、總じて女子小兒等にても無用の人出入堅禁制の事

一多葉粉制禁の事

一勤行掃除等、必怠慢あるべからざる事

一常に老病死を念じて、稱名勇進すべし、假にも戲笑雜話堅禁制の事

右の條々堅く相守り、專修稱名勇進相續せしむべし、若違犯せしむる者においては、速に離弟擯出せしむべき者也

寛政十年戊午七月

光 譽 性 如 判

法岸上人の後をうけて尙一層努力されたのが先師法洲上人である。上人は稟蓮社承譽と號し長州大津郡河原郷の人である。俗姓は中井氏にして世々國公に官たりとある。明和二年乙酉四月十四日に誕生せられた。幼時より三寶に歸依篤くその母を失ひて三年間風雨を厭はず慕參し孝子と讃稱せられた。墓所の近くの常に花香を調度せられてゐた桂庵カッラに法岸上人の弟子たる關隨唯稱慈教の三尼がありて、洲師の孝に感じ又佛に歸依される事の篤きを見て雜修を止め無上の大善專修念佛を修せられる様に勧められた。當時未だ在俗であつた法洲上人はいみじく思はれて天明七年三月十三日大日比に至り十四日岸師に値遇され師資の盟約を願はれた。其の後父君の許可もあつて九月二十八日に剃髮せられ、その後は大日比にあつて修行され二十五の時京都北野轉輪寺に留錫せられた。此處でも專修念佛に餘念なく後關東に下向され縁山に入られたのである。縁山を出でられた師は方々に留錫され、その化益も廣くその間に住職された寺も十指を數ふ程である。岸師隱棲後西圓寺住職たりし寂譽常稱の遷化の後師命により早速大日比に向はれ文化九年七月十二日晋山せ

られた。その間の上人は通師を慕はれ日課怠らず名僧の譽高く、住職後は隔日に岸師を訪はれ法門の精微を問はれた。師の化益功績も岸師に劣らず傳にも其の消息を詳細に記してある。現在も行はれてゐる無言別行は師も又行はれた所である。住職後七年にして寺職を弟子靈幢に譲られ自由なる體になられてより諸方面に化益の旅を續けられ法岸上人行業記兩卷の開版をもなされた。又起信論を福山洞林寺に於て講説されし事もあり、學解の方面に於ても卓絶されておられた。その他師はある時一向門徒の爲に流罪に逢はれたが間もなく事なきを得られた事もある。師は又貧者には食を與へ、困れる者には救助の手を伸ばされる等社會事業方面の活動も又見るべきものがあつた。後病の難治を知られ天保十年五月廿一日弟子法道へ專修相續の要務、自利々他の法門を遺囑せられ、其の後も歿後の萬全を期せられて同年七月十三日申の上刻春秋七十五法臘五十二にて遷化された。

法道上人は德蓮社元譽と號し、九歳の時萩の功蓮社に於て法岸上人に請はれて大日比へ赴かれた。文化九年十一月十五日得度されて法洲上人の弟子となられ、解行怠らず夙夜策勵された事は前二師にも劣らず、前二師と同様に緣山にも赴かれ各方面に留錫して益々修行せられ化益も又大きかつた。西圓寺住職は先師法洲上人隱棲後間もなく靈幢の辭職により推されて遂に二十一歳の四月朔日晋山せられた。師の扶宗護法并に化益に就て述ぶる事は煩雜に過ぎるので御覽察を御願する。詳しき事は何れも三師傳に記する所である。師法臘五十三にして文久三年六月廿三日往生し給ひ御臨終に際して結縁した者も多いと云ふ。

以上冗長の所も多々ある事乍ら大體三師に就て述べたが、現在の大日比は三師によりて完成されたものである事は前述の通りで別行の講説も三師の意を體して行はれ、講題も一定してゐる。關通上人の流を汲んでゐる西圓寺は法船庵と不即不離の關係にあり、前述の通り專念佛場で前の管長山下大僧正も一時住職され丸山の御廟所に御墓もある。丸山に近接する「隱居所」と呼ぶ隱室は大日比浦を一望し、庭園には「青蓮」も植えられてゐる。

従つて訪ふ人多く、殊に四月より十月の間は定期の青海島周遊船があり、雄大なる青海島の海岸美并に奇岩怪石に目をみはつて後、瀬戸内の如き大日比浦に入つて西圓寺并に法船庵等に參拜するのは絶好のコースである事を紹介して筆を擱かう。